一夜の過ち

早見 彼方

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

男は、大学時代の女友達である高垣楓と一夜の過ちを犯してしまう。これは、そんな過ちの夜をきっかけに始まる二人の恋愛模様を描いたお話。

目次

高垣楓 …… 1
高垣楓2 …… 6
高垣楓3 …… 11
高垣楓4 …… 17
鷺沢文香 …… 24
高垣楓5 …… 30

高垣楓

夏場の蒸し暑い朝を迎えた俺の意識を覚醒させたのは、午前六時を指す目覚まし時計の音でも、右手にある窓から差し込む強い陽射しでもなかった。部屋の中心に置かれたテーブルの上に散乱する缶ビールの数々と、ベッドにあった複数の使用済みコンドーム。そして、俺と同じく全裸でベッドに横になる美女の存在だった。

「んっ……」

目を瞑って眠る美女は澄んだ声で小さく声を漏らし、神秘的といった表現の似合う顔を気持ちよさそうに緩めている。シーツ一枚という薄すぎる布で体の大事な部分を隠し、すらりとした足を伸ばしている。見えるか見えないかといったギリギリの場所から窺える太股は色白く、俺の視線を引きつけた。

邪な考えが浮かびそうになったところで、俺は頭を左右に激しく振った。

まずい、非常にまずいぞ。

考えれば考えるほど焦燥感に駆られ、俺の背中に嫌な汗が伝った。これは夢なのではないかと現実逃避をしたい気分になるが、今も肌に伝わる美女の感触が夢ではないと俺に自覚させた。上体を中途半端に起こした俺の左腕は美女の両腕に掴まれ、身動きが取れない。無理に引き剥がすことはできるが、そうすれば絶対に相手は起きてしまうだろう。

美女を起こしてしまう前に、自分の心の整理が必要だった。

俺は深呼吸を二、三回繰り返しても一向に鎮まらない心臓の鼓動を無視し、昨日の出来事から遡って記憶を巡らせた。

昨日、俺は仕事帰りに大学時代の友人と飲みに行った。友人の名前は高垣楓（たかがきかえで）。俺と同い年の二十五歳で、性別は女だ。肩まで届く髪はふわふわとした軽い印象を抱かせ、緑と青という左右で異なる瞳を有する彼女。背も女性にしては高い１７０センチでモデルのようなスレンダー体型。数年前まで実際にモデルをしていた彼女は、誰が見ても美しいと言える容姿だ。

そんな高垣と俺は、ただの飲み友達だった。大学生のときに仲を深めたきっかけはなんだっただろうか。今となっては記憶が曖昧だが、確か大学の新入生歓迎会だったような覚えがある。高垣と俺は隣同士の席に座っていたはずだ。そこで話をしたはずだが、会話の内容は殆ど覚えていなかった。

一回目の出会いをきっかけに、俺たちは友人としての関係を築いた。酒が飲める年齢になって初めて飲みに行った際に発覚したことだが、高垣はそれはもうよく飲む女で、酔うと駄洒落やら冗談を遠慮なく飛ばす性格だった。見た目とのギャップに驚き、高垣のギャグで返答できずに凍りつく面々がいる中、俺だけは普通だった。両親が高垣のように酔うと剽軽になる性格だったために慣れていたかもしれない。

高垣とは友人として遊びに行ったり飲みに行ったりしたことはあったが、それ以上の関係にはならなかった。俺自身、当時は気になっていた人がいたこともあったし、高垣自身もそういった関係を望んでいないと何となく察していたからだ。

高垣は見た目はいい。稚拙な表現だが、女神と言う言葉を使っても誇大広告にはならないだろう。だが、中身はどうしようもない女だ。昨日、宅飲みをした際には家主である俺よりも騒ぎ、テレビに映っていた芸人の芸を見た後に一発芸を披露し始めた。それを見た俺は何故か対抗心を抱き、会社の飲み会の為にと温めておいた一発芸を全解放。火に油を注ぐが如く、高垣の熱を高めるに至ってしまった。

記憶が薄まったのはそこからだ。互いに酒を飲む速度を上げ、一発芸の応酬をしたのを覚えている。途中で王様ゲームや野球拳をしたのも何となく記憶にあった。だが、それ以上先はもう闇の中だった。

俺が高垣と何をしたのか。それは語るまでもないだろう。同じベッドにいる全裸の男女。使用済みコンドーム。夏場で汗に塗れた体には、明らかに汗以外の体液が付着していた。これで実は何もなかったというほうがおかしいと思える状況だ。

俺は顔を両手で覆った。

やってしまった。長年の飲み友達と一線を越えてしまったのだ。

これが一夜の過ちか。自分には無縁だと思っていた出来事に直面し、肝が冷える。避妊はしているようだが、果たして徹底されているのだろうか。誤って生身で繋がり合ってはいないだろうか。
「はぁ……」
「おはようございます」
責任という言葉が重く圧し掛かるのを感じながら俺がため息を吐くのと、横から声を掛けられたのは殆ど同時だった。俺のため息は十分に出し切ることなく止まり、心臓の鼓動が停止した。何もかもが停止したように感じる中、俺は壊れたロボットのように首を動かし、声の聞こえたすぐ左横に視線を向けた。
「おはようございます」
改めて掛けられた挨拶。声を放った美女、高垣はしっかりと俺の顔を見据え、柔らかく微笑みながら俺の腕を抱き締めた。絶対に放さないといった熱い抱擁。夏の熱気に満ちた部屋で掻いた互いの汗が触れ合い、混ざり合う。
どうしてエアコンが消えているのか。場違いな疑問が浮かび、足先にエアコンのリモコンらしき硬い物を捉えて、誤って消してしまったのかもしれないなという答えが自分の中で生じた。
軽い現実逃避。しかし、現実は待ってはくれない。
高垣が俺の腕ではなく、首に両手を回した。その際にシーツがずれ、高垣の上半身が露わになるが本人に気にした様子はない。驚きに開いた目で俺の目が高垣の胸元の膨らみに向きそうになったとき、高垣の顔が近づいてきた。
「た、高垣……？」
「キス、しませんか？」
そう言って高垣がいつにない真剣な、しかし恋人のような甘い雰囲気を漂わせて迫って来た。その様子に俺は息を呑んで受け入れてしまいそうになるが、咄嗟のところで働いた理性によって高垣から顔を遠ざける。
「だ、駄目だって……」
「どうしてですか？　やっと、あなたと結ばれたのに……」

やっと？　高垣の発言に引っかかりを覚えたが、今はそれどころではない。
俺はどうにか高垣の手から自分の体を離し、ベッドから体を起こす。その際に股間が露わになって高垣のやけに嬉しそうな視線がそちらに向くが、シーツの端を掴んで股間を隠し、そのまま流れるようにベッドの上で正座をした。
高垣も空気を飲んでくれたのか、シーツで体を隠しながら正座をした。
一つのベッドの上で、シーツで体を隠しながら正座で向き合う男女。なんだこれ、という思いが頭を過ぎるが、客観的に自分の姿を考察している場合ではない。俺はこほんと小さく咳をし、引き締めた顔で高垣を真っ直ぐ見つめた。何故かそのとき、高垣の顔が酒のせいではないほんのりとした赤みを抱いた。
「まずは、謝罪を」
俺は上体を倒し、頭を下げた。それは殆ど土下座だった。人生初めての土下座を全裸で行ってしまうという事態に思うところはあったが、それも今はどうでもいい。とにかく今は相手に誠意を見せるべきだ。
「本当に、申し訳ない」
「どうして謝るんですか？」
「いや、だって……」
高垣の疑問の声に、俺はゆっくりと頭を上げて上体を起こした。高垣は小首を傾げていた。冗談ではなく、俺の謝罪の意味を本当に理解できていない様子だった。
「どこもおかしくはないと思いますけど」
「いやいや、おかしいだろ」
もしかして高垣は寝惚けているのだろうか。
そう思う俺に向かって、高垣は至って平然ととある言葉を口にした。
「そうでしょうか。恋人なら、普通ですよね？」
「……え？」

恋人？　その言葉に俺が固まる中、高垣は俺の胸元に頭を押し当てるようにして身を預けてきた。両手は俺の背中に回り、しっかりと抱擁される。女性の柔らかい感触がこれでもかと体の至る箇所を襲い、余計に俺の思考は停止した。

「ようやく、あなたと恋人の関係になれました。待ち焦がれていた関係に」

高垣の声が遠くに聞こえるような感覚。おそらくだが、俺の意識が現実を現実と受け入れられずにいるのかもしれない。これは夢だと思い込み、早く夢から覚めようと意識が現実からの本格的な逃避を始める。

「もう、絶対に放しません。二度と、誰にも渡しません」

しかし、高垣の耳元で囁かれた声によって、俺の意識は強制的に現実へと引き戻された。残酷なまでの甘さ。体は震え、心まで魅了されてしまいそうなその声に、熱い抱擁に、俺はただ黙って息を呑むことしかできなかった。

「昨日誓ったことは、守ってもらいますからね？」

昨日、何があった。高垣の発言に込められた強い想いを感じ取り、俺はもう何も言わずに高垣の体を抱き締め返した。ここで高垣を拒絶すると恐ろしい目に遭いそうな気がする。高垣の瞳に宿っていた危ない色香は俺に恐怖心を抱かせるには十分だった。

その場の空気に流される自分が恨めしい。

「あなたを幸せにできるのは、私だけです」

そう口にした高垣に、俺は抵抗することもできずに押し倒された。

高垣楓2

天にも昇る気分だった。持て余していたものを発散し、抱えていた欲求が一気に満たされた。でも、まだ俺の体は元気なままだ。行為そのものは終わっても、相手が俺の体をぎゅっと抱き締めているからだ。

「やっぱり、体の相性がすごくいいみたいですね」

と、笑みをこぼす高垣。ベッドに背中を預ける俺の体に折り重なって、温もりを求めるように抱擁を続ける。シーツに覆われて中の様子は見えないが、汗やら何やらすごい状態となっているのがわかる。

結局、場の空気に流された。高垣に押し倒された時点で拒むこともできたはずだが、容認してしまった。酔いつぶれた昨日とは違い、今度は記憶にしっかり刻まれている。普段とは違う乱れに乱れた高垣の姿をいつでも思い出せる。

羞恥を覚え、俺は視線を横に逸らした。

「どうかしましたか？」

青い瞳と緑の瞳。左右で色の違う神秘的な目で俺の顔を捉え、高垣は小首を傾げた。

「べ、別に……」

俺は言葉に詰まりながら呟いた。

静かな時間が流れる。互いに会話もない。聞こえるのは冷たい空気を垂れ流すエアコンの小さな音と、それよりもはっきりとした高垣の息づかいと心音だった。艶っぽい声が高垣から漏れるたびに、俺の体がいろいろと反応してしまう。

「もう一回しますか？」

「いや、大丈夫だ」

「そうですか……」

俺の体の反応にいち早く気がついた高垣が期待するように聞いてきたが、断っておいた。そんなに残念なのか少し気を落とした様子の高垣が、すごく可愛かった。落ち込みつつも、何が面白いのか飽きずに俺の顔を眺めている。

俺は別に高垣に釣り合うような美形ではないというのに。
「なあ、高垣」
「名前……」
「え？」
「名前で呼んでください」
聞きたいことがあって話しかけたのだが、思わぬ事態になった。
俺の喉が詰まった。
高垣と初めて出会ったときから、俺はずっと『高垣』と呼び続けていた。その呼称を急に変えることは意外に大変だ。こう、照れ臭いようなくすぐったいような感覚を覚えて体が落ち着かない。
「名前で呼んでくれないと」
言葉を区切った高垣は頬を緩めたかと思うと、顔を近づけてきた。
「んっ……!?」
俺の唇に、高垣の唇が重なった。しっとりと潤いを帯びた小さな唇。柔らかさと体温によって頭に熱が昇る。それ以上のことを既に何度もしているのだが、それでも興奮の発露は抑えられない。
それは高垣も同じようだった。
「何度でもキスしちゃいますからね？」
一旦中断し、それだけ言うと、またキスを放つ。
近すぎる美貌。息も心臓の鼓動もさっきより強く感じる。
高垣はオッドアイを細め、笑う。まだですか？　とでも言うように首を傾けた。ふんわりとした髪の毛が俺の頬を撫でた。くすぐったいが、今はそれ以上の鮮烈な感情が俺の心を満たしていて、相対的に気にならなかった。
「ぷ、はぁっ……」
今、何回目だ。数え切れない接吻を繰り返してなお、息継ぎをした高垣の顔が接近してきた。
「か、楓……」
頭がどうにかなってしまいそうだった俺は、高垣の名前を口にした。
「はい、あなたの、あなただけの楓ですよ？」

高垣、楓は今日一番の笑顔を見せると、俺の唇に吸いついた。
やめてくれるんじゃなかったのか。不意を突かれた俺の頭が、興奮と幸福に溢れる。こんなに満たされたことはあっただろうか。なぜか走馬灯のように過去の記憶が流れる中、俺の脳裏に前の彼女のことが過った。
『私たち、別れましょう?』
短く、簡潔な言葉。それを最後に、彼女は俺との関係を打ち切った。
何が悪かったのかわからない。好きだったから、彼女が求めることは何でもしたつもりだ。彼女もそれを喜んでいたと思っていた。だから、突然の別れは衝撃的で、今も俺の心に傷跡を残している。
それ以来、彼女とは会っていない。電話も掛けていない。
人伝いの噂によると、彼女は既に恋人を作っているらしい。
そして、これも噂だが、まだ俺と交際中に彼女は現在の恋人と夜のホテルに。
「駄目ですよ」
耳に注がれた声に俺は我に返り、目線を振り向けた。
「他の女性のことを、考えないで」
楓の顔が俺の肩に埋められ、表情は隠れていた。
「あんな酷い人のことを、思い出さないで」
何かを知っているような口振りだった。
「あなたはもう、私の恋人です」
楓の手が俺の手に回る。強められた抱擁は少し痛かった。
胸が押しつけられ、足が絡んでくる。その密着を俺は全て受け入れた。
長い抱擁の後、顔を上げた楓は、俺を求めてきた。
「好き」
耳元で囁かれ、体に触れられる、顔を覗き込まれる。
ほんの少しだけ、楓の表情が怖いと思えた。何かに対する怒りを内に秘め、それを俺に対する愛情で無理矢理蓋をしているようだった。
「あなたは傷つけさせない」と感情を強く波打たせた後、再び俺と一つになった。

「好き、大好き、愛しています。傍に置いてください。あなたの隣で、あなたの声を、温もりを、愛を感じていたい。私では駄目ですか？
私は絶対に浮気はしませんよ？　あなたの幸せしか考えていません。私ではなくても、他の女性があなたを幸せにしてくれるだけでも私は十分幸せだった。それなのに、あの人は」
珍しく、声を荒らげる楓。光を失ったように盲目的な眼差しが俺を射抜く。
いや、俺を通して別の誰かを責めているようだった。
その様子を、らしくない楓を見たくなくて、俺は咄嗟に手を伸ばした。
楓の頭を両手で抱き締める。すると、楓はビクリと肩を震わせた。
「ごめん、なさい……」
正気を取り戻し、大人しくなる楓。息も整えられ、心臓の鼓動も緩やかになっていく。
「ごめん」
「謝らないでください。あなたは何も悪くない」
「それでも、ごめん」
俺のことを考えて、ここまで怒ってくれる人は親以外に会ったことがない。
「あと、ありがとう」
お礼の言葉と、俺は自分からは初めての口づけを楓に贈った。
今日で数え切れない口づけを、交わりを経験した。でも、そのキスは特別な感じがした。俺は気持ちの整理をつけ、楓を本当に心から受け入れられたからなのかもしれない。前の彼女のことを完全に忘れることはできていないけど、これから少しずつ忘れていくことはできる。
俺は自分の想いを伝えようと、楓をベッドに押し倒した。
「好きっ、好きっ、好き好き好きっ」
「俺も、愛してるよ」
愛の深い楓を組み伏せ、覆い被さる。体が熱い。エアコンは点いているのだが、汗が止まらない。二人で汗だくになって、俺たちは互い

の存在を確かめ合った。
　二人だけの時間を過ごしていると、時刻は正午を過ぎていた。
「楓」
「はぁい」
「そろそろ放してくれないか？」
　二人で片づけをしてシャワーを浴びた後、俺たちは服を着てソファーに座っていた。ただ普通に座る分には問題ないのだが、なぜか楓は俺の膝に跨って正面から抱き着いてくる。首筋に鼻先を当てて、キスをしたり匂いを嗅いできたりしている。
「もうちょっとだけ」
「五分前にも同じこと言ってたけどな」
「本当にあと少しですから、五分、いえ、十分だけ」
「伸びてるんだが……」
　嘆息しつつ、俺も楓の背に両手を回す。
　容易に手が回る華奢な体。抱き締めると、その細さがわかる。
　俺が愛し、俺を愛してくれるこの人を守ってあげたい。
「あ、言い忘れていました」
「なに？」
「今度から私、あなたの家で暮らしますね？　私の愛しい恋人に、悪い虫がつくと困りますから」
　少し冷たさを帯びた声。冗談ではなく、本気の発言だということがわかった。
　楓は俺には勿体ないほどに魅力的な女性だが、やっぱり少しだけ怖い。俺は苦笑いをしつつ、心からそう思った。

高垣楓3

爽やかな朝の訪れとともに、俺は緩慢な動きで体をベッドから起こした。

枕元の時計を見ると、まだ時刻は午前五時だった。しかし、八月の五時台は薄っすらと外が明るい。窓のカーテンを開いてまだ穏やかな日差しでも取り入れようかと思ったところで、すぐに考えを改めた。

寝惚けていて、俺の右横で楓が眠っているのを失念していた。俺と同じく全裸でベッドに横になっていて、体を隠しているのはシーツだけ。うっかりといろいろな部分が見えかねず、見たいという欲求に駆られそうになって、頭を振って邪念を慌てて払った。

昨日も随分と盛り上がったおかげで睡眠不足だ。昨夜の九時には楓と一緒に床に入って、眠ったのは日付が変わってから。その間、何をしていたのかは言うまでもない。楓に誘われるがまま、長時間に亘って恋人としての熱い時間を過ごした。今日が土曜日で良かった。

「ふ、ぁ……」

欠伸が出てしまい、眠気が押し寄せる。さすがにこの時間に活動を始めるには休息が足りていない。起きるのはやめて二度寝をしようと思い、元の位置に体を横たえて、眠るまで隣の楓の顔を眺めていようと思った。

「おはようございます……」

視線を向けるより先に掛けられた声。軽く驚いて目を向けると、悪戯成功、とでも言うかのように楓はにっこりと微笑んでいる。「子供かよ……」と俺が呆れたように言うと、楓は俺の右腕を引き、抱き着いてきた。

肌に伝わる柔らかさ。抱かれている場所が胸元だから余計に鮮明だった。

「しますか?」

何をと聞かなくてもわかる。それくらい、俺たちの間では日常的な愛情表現となっていた。

俺と楓が同棲を始めて半月が経っていた。他所様が見れば、俺たちは非常に甘すぎる生活を送っていることだろう。楓がどうやら仕事の同僚に俺との生活を話してしまったらしく、それを聞かされた相手はひたすらブラックコーヒーを啜っていたようだ。

仕事といえば、俺は楓の現在の仕事を最近になって初めて知った。

元々モデルをやっていた楓は、アイドルに転向したらしい。ベッドの上で話してくれた。飲み会のときに仕事の話はやめておこうという俺の配慮のおかげで発覚が遅れた。それにしても、楓がアイドルか。今でも驚きだ。しかも俺が知らなかっただけで、人気急上昇中らしい。まだ俺は二十五歳なのに、世間の流行にだいぶ遅れていると知って密かに愕然としていた。

それと、俺は思った。

楓がアイドルならば、俺は楓とこんな関係になっていていいのか。恋人がいることがバレたら大変なことになると思うのだが、楓は当たり前のように俺の傍にいる。所属している芸能事務所内では恋愛は禁止になっていないというのが楓の言い分だ。

ただ明言していないだけで、暗黙の了解とされているだけだと思うのだが、楓を含むアイドルたちはそうは思っていないらしい。中には、平然と意中の男を射止めたアイドルがいるらしい。楓と『ミステリアスアイズ』というユニットを組んでいる女子高生アイドルもその一人で、積極的なアプローチによって大人の男を陥落させたらしい。

他にも、担当のプロデューサーを堕とす、または堕とそうとしているアイドルがいるようだ。両親の協力を得て外堀を埋めようとしている子もいると聞いて、何それ怖いと俺は戦慄した。いずれも男のほうから言い寄ったわけではなく、女のほうから攻略しに掛かっている。

世間の恋愛観は変わりつつあるようだ。いや、局所的な事象かもしれないが。

楓もまた、俺を手放すつもりはないらしい。

ぼうっと考えていると、楓が身を寄せた。

「寝惚けているんですか……？」

耳元に向かって、吐息をたっぷりと含んだ声で囁かれる。ゾクリと背筋が震え、意識が蕩ける。これはまずい。もう何度も体験しているはずだが、一向に慣れる気配はない。優しく澄んだ声音で何度も囁かれるだけで、脳が幸せ一色に染まってしまう。

目が蕩け、体から力が抜け落ちる。

それを見ていた楓の顔に、複数の感情が広がっていた。

嗜虐心、征服欲、盲目的な愛情。

綺麗なオッドアイから、理性の光が薄れたように感じた。暗く、深く、見つめているだけでどこまでも吸い込まれてしまいそうだ。いつの間にか距離はさらに近づき、楓の射程圏内に入っていた。身を限界まで接触させた状態で、何かを話しかけられる。

「同棲の夢は叶ったので、次は結婚ですね……」

「いずれは子供も……。何人欲しいですか……？」

「素敵なあなたを捨てた、見る目のないあの人は、破局してしまったようですよ……。また懲りずに二股して、それがバレてしまったようです……。いろいろと大変みたいですけど、私たちにはもう関係ないですよね……？」

「でも、よかった……。あなたを捨ててくれて……。おかげであなたを手に入れられた……」

話の内容は聞き取れなかった。その頃には、既に意識が沈みかけていたから。

目蓋が重たい。楓の暗い瞳を見つめていたが、俺はゆっくりと視界を閉ざした。

「あなたは、私だけのもの……。ふふっ……。今日もたっぷり、愛してあげますね……？」

何を言っているのかはわからなかったが、何かをされるということだけはわかった。

再び目覚めたとき、眠気はなくなっていた。カーテンを開くと、先ほどよりも日は高く昇っていた。時計の針は午前七時を指している。隣には楓はいない。ベッドの様子を確認すると、二度寝をする前に比

べて新しい湿り気を帯びていた。
ベッドから起き上がって服を着て、シーツを持って部屋を出た。
汚れたシーツを洗濯機の前の籠にひとまず入れておき、足を台所へと向けた。
「おはようございます」
「おはよう……」
改めて俺に挨拶をした楓は、料理をしていた。俺のワイシャツを着ていて、その上にエプロンを着用している。ワイシャツの下には何も着ていないらしい。体の線が鮮明に見て取れてしまうため、そこから視線を逸らす。
「手伝おうか？」
「もうすぐできるので大丈夫です。待っていてください」
楓の柔らかい微笑みを向けられ、油断して顔が赤らみ、心臓が高鳴った。最近の俺はおかしい。急に接近され、触られて、優しい笑顔を向けられるだけでドキドキしてしまう。こんなに俺は緊張しいだったか？　そんなはずはなかったと思うのだが。前の彼女と付き合っていたときだって、ここまでの反応をしたことはなかった。
「わかった」
言われるまま居間に向かい、食卓の席に着く。
俺の部屋はマンションの１ＬＤＫの一室だ。一人で暮らす分には問題ないが、楓と一緒に暮らすのならばもう少し広い方がいいだろう。いつかは家を建てて、そこに楓と住みたいとも思っているし、いつかは子供だって作りたいと思って――。
「ん……？」
あまりに自然に考えてしまって、俺は遅れて首を傾げた。俺はこんなに子供を作りたいと思っていたか？　いや、楓と愛し合っている自覚はあるし、いずれはと思っていたが、自分の中でここまで欲求が強くなっていることが不思議だった。
「できましたよ。朝食にしましょう」
楓が料理を運んできて、俺は思考を中断した。
「いただきます」

席に着き、揃って声に出す。さて、食べようかと思って箸を手に取るよりも先に楓は行動に出た。
「あーん」
笑顔を浮かべた楓が玉子焼きを掴んだ箸を、俺へと差し向けてきた。
「だから、それは……」
さすがに恥ずかしい。毎回断っているのだが、今日の楓は妙に粘り強かった。
「あーん」
「なあ……」
「私のこと、嫌いですか……？」
笑顔のままのはずだが、何か妙な気迫を感じた。恐れの感情で肝が冷える。ただの笑顔がなぜここまで。これが尻に敷かれた旦那の気分なのか。などと考えつつ、根負けした俺は「わかったよ……」と言って口を開いた。
玉子焼きが口に入り、俺はそれを咀嚼した。甘く深い味わいと、ふっくらとした触感が広がる。噛むたびに唾液がわき出てくる。俺が作る硬くて平べったい玉子焼きとはまるで違う。この玉子焼きを、毎日食べたいと思えてくる。
どうやら俺は胃袋まで掴まれてしまったらしい。
「美味しいですか？」
「ん……」
玉子焼きを堪能しながら、俺は首を縦に振る。それだけで楓の機嫌は良くなっていき、今度はかぼちゃの煮物を箸で掴んだ。自分で食べるわけではないようで、まだ玉子焼きを食べている俺の口が開くのを今か今かと待っている。
「もういいから。自分で食べられるから」
「もう一回、あと一回だけでいいですから」
妙な要求に拘る楓に呆れつつ、俺はまた口を開いた。
そのときに見せた、楓の笑顔は本物で、俺は本当に愛されているのだと思う。

俺は今、幸せだった。彼女に振られ、傷心だった頃が懐かしい。俺の心の傷も埋め尽くすほどの愛情を楓に注がれ、俺もそれに応えた。毎日ベッドで寝不足になるまで愛し合うのは勿論、時にはそのまま朝を迎えることもあった。

俺ばかりがこんなに幸せでいいのだろうか。

もっと、俺から楓にできることはないのだろうか。

考えてみるが、大それたことは想像できない。今の俺にできることをするべきだろう。

「今日、デートに行かないか？」

思えば、楓と二人でデートらしいデートをしたことはなかった。大抵は飲みに行くか、自宅で飲むか、ベッドで愛し合うかの三択。恋人として、もっと楓の新しい一面も見てみたいとも思っていた。

「はい、喜んで」

何気ない提案に、楓は予想以上に喜んでくれた。それが嬉しくて、俺は頬を緩めた。

高垣楓４

体に触れていた熱が薄れ、高垣楓は意識を覚ました。
目を開けると、室内は夜の暗闇に支配されていた。今は何時だろう。気になって枕元にある目覚まし時計に目を向けようとしたとき、楓は男の背中を少し離れた正面に捉えた。その瞬間には、時間を確認することなど頭から抜けて落ちた。
背を向けている男、愛する彼に身を寄せる。大きな背中を抱きしめる形で体を密着させる。互いの接触を妨げる余計な布地は一切存在せず、薄れていた熱がじんわりと戻ってくる。どうやら先ほどまでは一緒に抱き合っていたが、彼が寝返りを打ったことで離れてしまったようだ。
今度は離さない。
楓は大切な宝物を抱き、艶やかに微笑んだ。それは、アイドルとしてステージに立ち、大勢のファンに向ける慈愛に満ちた笑顔とはまるで違う。彼の傍にいるときだけに見せる、恋に溺れた女としての顔。
「ふふっ……」
その顔ができるようになったのはここ最近だ。
愛する彼を泥酔させ、自分を抱いてもらったあの日。正常な思考などあるはずのない彼を楓は誘導し、魅了し、関係を築いた。彼が元恋人である彼女の名前を口にしたときには身を焦がすような嫉妬心に駆られたが、それすらも利用した。
彼と彼女は別れた。彼は振られたのだ。
意味がわからないと今でも思う。こんなに素敵な人を捨てるなど。
楓は確かに、昔から周囲の人間と価値観がどこか違っていた。恵まれた容姿のために異性から言い寄られることも多かったが、楓の心を惹く人はいなかった。中には彼よりも容姿の優れた人は大勢いて、それでも全てを振った自分のほうがおかしいのかもしれない。
でも、やはり楓は彼女の気持ちがわからなかった。一度付き合っていれば、彼の素晴らしさは十分に伝わるはず。こんなに素敵な人を手放すなどあり得ない。それなら最初から手を出さないでほしいと

思った。
そうすれば、自分がずっと彼と付き合えていたというのに。
初めからずっと。
『高垣って、なんか無理してないか？』
楓はふと、初めて彼に声を掛けられたときのことを思い出した。
それは大学生時代の新入生歓迎会のときの記憶だった。

楓は人との会話があまり上手ではなく、これまでの人生でろくに友人を作ることができなかった。どうにも、周囲が楓に求めている内面と、楓の本当の内面というものが乖離しているらしく、友人関係も一時的なものが多かった。
いつまでもそれではいけない。自分の性格を多少着飾ってでも、周りに合わせていくべきだ。楓は大学では友達を一人でも作ろうと奮起し、歓迎会に参加した。
しかし、結果は芳しくなかった。
言葉を選び、態度を取り繕い、周りが求める理想の高垣楓を演じたつもりだが、どうにも上手くいかない。理想の自分とはなんだろう。それは本当に自分なのだろうか。好きな駄洒落も、好きな芸人についても語れない。自分を偽る言葉を紡いでも、それに熱は宿っていない。淡泊な女、とでも思われてしまったようで、歓迎会という場で孤立してしまった。
頼んだジュースをちびちびと飲み、ただ時間が過ぎるのを待つだけの居心地の悪い時間。どうして自分はここに来てしまったのだろう。頑張ろうという気力はいつの間にか萎んでしまい、後悔が胸中に広がっていた。
「高垣って、なんか無理してないか？」
「え……？」
横から突然掛けられた声に少し驚き、楓は肩を震わせ、慌てて視線を振り向けた。
そこにいたのは、歓迎会で隣の席になった男だった。見た目は平凡。体格も普通。世間的に見ればどこにでもいる普通の男だった。

ただ、性格は明るく、先ほどは初対面の先輩相手とも仲良く談笑していたのを見て、楓は羨ましいと密かに思っていた。
少し前まで席を外していたはずだが、なぜ戻ってきたのだろう。周りには楓以外に誰もいない。まだ他の新入生や先輩たちは別の席で話し込んでいる。孤立している楓を哀れんだか、楓の外見に惹かれてやってきたかのいずれかだと楓は思ったが、そのいずれでもなかった。
「無理、というのはどういう意味ですか？」
図星を突かれ、意図せずに声にわずかな苛立ちが込もってしまった。楓は急いで口を閉ざす。
やってしまった。初対面の人に怒りをぶつけるような真似をしてしまい、気分が落ち込む。これでは友達などできるわけもない。まともに会話すらできないような人間ならば、やはり歓迎会などに来るべきではなかった。
ちらりと、楓は横目で彼の反応を窺う。
彼は特に気にした様子もなく、唐揚げを美味しそうに食べつつ、ウーロン茶で流し込んでいた。その表情は緩んでいて、とても美味しそうに見えた。そういえば、ここに来てまだあまり食べていなかったことに気がつき、楓は思い出したかのような空腹に襲われた。
箸で唐揚げを取り皿に運び、かぶりつく。パリッと衣は適度に分厚く、硬い。中身は歯切れのいい肉質で、肉汁が溢れ出る。確かに美味しい。楓は目を見張り、口元を隠すことなく唐揚げを頬張った。
それを今度は彼が見ていたようで、柔らかく笑った。
「美味しいよな、それ」
言われてすぐに、楓はすぐに男から視線を逸らした。ゆっくり味わいたいと思ったが、飲み物で早々に喉に流し込み、口元についた衣の破片をハンカチで拭う。今さら遅いが表情を取り繕い、こほんと空咳を打った。
「その、食べているところをあまり見ないでほしいのですけど……」
「ああ、悪い。でも、そっちだって見てただろ。お互い様ってことで」
咎められたと思ったのか、男は弁明するように言って、頬を緩めた。

毒気を抜かれる笑顔だ。これが人付き合いを円滑に進められる秘訣なのだろうか。独りでいた楓に平気で話しかけてくるくらいだから、度胸もあるのだろう。改めて、彼の性格が羨ましいと思えてしまう。

「それで、無理というのはどういうことでしょうか」

その感情を誤魔化すように、楓は話題を元に戻した。気になったのだ。楓が自分の容姿に合った振る舞いを見せようとして、加減がわからずに素っ気ないと陰で言われることはあっても、無理をしているという評価を得たことはない。

男はどうしてそう思ったのかが、知りたかった。

「言葉通りだけど。高垣ってたぶん、周りに合わせようとして自分の本来の性格を隠してるだろ？　素の自分のまま、いろいろな人と喋ったり、笑い合ったりしたいと思っているように見えるんだよな」

「なんで、そこまで……」

「どうして隠しているのかって思ってさ。あ、すみませーん。それ、貰ってもいいですか？　ずっと話していたからお腹減っちゃって」

楓の口からこぼれ出た疑問の声は聞こえなかったようで、彼は人が多くて賑やかな隣のテーブルから、余っていた料理を受け取っていた。会話が途切れてしまい、続けて問いを投げかけにくい。だが、彼はすぐに楓のほうを向くと、口元を綻ばせた。

「何か事情があったらごめん。そのときは聞き流してくれていいんだけど、人生なんて誰かに頼まれて生きているわけじゃないだからさ、他人と比較しすぎないで自分らしく生きるべきだと思うんだよな。勿論、誰かに迷惑を掛けないこと前提でな」

ニッと歯を覗かせて彼は笑った。見る者を安心させるような、穏やかな笑顔。両親以外では、楓にその笑顔を向けたのは彼が初めてだった。突然のことに息が詰まる。視線が彼の顔に固定され、心臓の鼓動が乱れた。

落ち着いて。ただ驚いただけ。楓はそう言い聞かせ、震えそうになる唇を開いた。

「それで、自分らしく生きる自分を、周りの人から否定されたら。どう

するんですか？」
「まあ、その場を離れて、自分に合う人を探すかな」
「探しても、探しても、見つからなかったら？」
「え？　あー。まあ、そういうこともあるか……」
　問いを投げかけ続けると、彼はうんうんと唸った。
　しばらく待っても、彼は悩んだまま答えを出してはくれなかった。もしかして、と思ったけど、彼にもわからないらしい。そうなると、自分はどうすればいいのか。もしもこの先、自分を認めてくれる人に出会えなかったら、ずっと孤独が続くのだろうか。
　孤独の寒さに震える自分。耐え凌ぐためには、偽りの自分という名の分厚く着心地の悪い衣服に身を包むしかないのか。楓はその場で俯き、誰もいなくなった向かいの席へと視線を走らせた。
「でも、高垣の場合は大丈夫だろ。他に誰もいなかったら、俺でよければ話し相手になるし」
　不意打ちのように掛けられた言葉。楓は再び彼を見た。
　残っていたポテトサラダを皿に運び、またしても美味しそうに味わっている。
　特に深い意図があって紡がれた言葉ではないらしい。人の機微に敏感な自分だからわかる。この人に明確な裏表は存在しない。本当に、周りに迷惑を掛けない範囲で自分の生きたいように生きているのだとわかった。
「友達に、なってくれるということですか？」
「もう友達だけど？　あ、ポテトサラダ食べるか？　これもめっちゃ美味い」
「あ、ありがとう、ございます……」
　お礼を言うと、彼は楓の皿にポテトサラダを盛り付けていく。こうやって、人の世話をすることに慣れているのだろうか。あれもこれもと、楓の前にいろいろな料理が並べられていく。他の人たちが話に夢中で手をつけずに冷めてしまった料理。それでも、楓は美味しいと思った。料理自体の味もそうだが、飾らない自分を見せられる人を見つけて、肩から余計な力が抜けたおかげかもしれない。

素の自分を見せ、二人だけで会話をした。楓は今でも、そのときに何を話したのか詳細に覚えている。彼の趣味や特技、好きなものや嫌いなものも。それと、現在気になっている人のことも。

彼と知り合うきっかけができただけで、そのときの楓は彼に明確な恋心は抱いてはいなかった。しかし、唯一の友人として彼と話し、いろいろな場所へと遊びに行き、ただの友達として一緒にいる時間が増えたことで、特別な感情が徐々に芽生えていった。

この人の傍は居心地がいい。この人の傍に、もっといたい。

鋭いようで、妙なところで抜けている部分もある彼は、楓の中で膨らむ感情を見抜けてはいないようだった。もしも察することができていれば、恋人ができたなどという報告を楓にすることもない。突如降り注いだ喪失感で言葉を失った楓に向けて、楽しそうに話を続けることなどなかったはずだ。

私が先に好きだったはずなのに。

電話口での報告で幸いだった。顔を見られていれば、楓の恋心は彼に気づかれていたかもしれない。楓ですら、この場でようやく気がついた自身の感情を、その相手である彼にバレたとなれば、冷静ではいられなくなるだろう。

下唇を噛み、痛みでもって自身を制御し、楓は取り繕った表情で言葉を紡いだ。

「おめでとうございます」

１００％の嘘で塗り固めた言葉。それでも、彼は気がついてくれなかった。恋は盲目というところか。楓の本心を察することができるほど鋭かった彼は、その言葉を真に受けた。

何もかもが遅かった。どうして、こうも悠長にしていたのだろう。自分のことを一番わかっていないのは自分だった。叶うのならば、昔の自分に戻って、彼を奪った相手よりも前に彼に想いを伝えたい。

もう何もかもが遅い。彼に恋人ができ、長い時間を、この後失うことになった。

彼の背中を抱く手に力を込める。今は、この体を抱けるのは自分だ

け。達成感が湧き上がる。抑えきれなくなって、表情に笑顔がこぼれる。室内の暗闇よりも濃い、どろどろとした黒い愛情を瞳に湛え、彼の肩に顎を乗せる。

そして、眠っている彼に向かって囁く。

「体の隅々まで、物理的に、精神的に、じっくりと愛してあげます。手料理であなたの胃袋も綺麗にして、脳にも網膜にも私の姿を焼きつけて、いずれはあの人のことを思い出せないようにしてあげます。ふふっ……。私の、私の友達。私の恋人。私の、私の私の私の私の。あなたは私のものになって、家庭を築いて、これから一生幸せになるんですよ？」

言葉にすると気持ちが昂る。このまま眠るのは無理だと思い、楓は彼の体に指を這わせた。

鷺沢文香

アイドルである鷺沢文香（さぎさわふみか）は、担当のプロデューサーを心の底から愛している。

十九年間生きてきて、初めての恋だ。彼の者の顔を思い浮かべるだけで気分は高揚し、体の内側に強い熱を孕む。まるでプロデューサーに抱き締められているかのようだ。以前、文香が事務所内にある階段から足を滑らせそうになったとき、身を呈して守ってもらったときの感覚を思い出す。

不謹慎ではあるが、あのときのプロデューサーは格好良かった。いつも格好良いのは言うまでもないが、あの瞬間は特に。常に冷静沈着で、驚いた顔など見たこともない。「我々プロデューサーは舞台装置だ。アイドルを輝かせる一要素に過ぎない。装置に余計な感情は必要ない。常に冷静であるべきだ」と普段から豪語していた彼が、慌てて飛び掛かり、文香を腕の中に抱きしめて階段から転げ落ちたときの必死な様子は忘れない。

あの瞬間を切り取って保存できるものならばそうしたい。だが、あの場には他に誰もおらず、二人を映すカメラも存在しない。

故に記憶の中だけに存在し、胸の内側に大切にしている。

勿論、文香にとって大切な思い出はそれだけではない。外で偶然出会ったプロデューサーに勧誘され、アイドルの道を踏み出し始めてから体験した日々が、どれも色鮮やかに輝いている。プロデューサーに対する愛情を強めるたびに、その輝きは日々増しているようだ。

「ふふ……」

文香は小さな笑みを淑やかに整った顔に滲ませ、ベッドの端に座ったまま体を捻って背後を見た。そこには、黒髪をオールバックにした二十代後半の男が眠っていた。

彼こそが文香のプロデューサーであり、意中の殿方だ。普段はジャケットまでカッチリと身につけている彼だが、文香の手によって丁寧に衣服を剥ぎ取られ、今では下着一枚になっていた。

初めてまともに見る男の体。女とは違い、はっきりと備わった筋肉

からは逞しさを感じた。文香は自身の大きな胸に手を当て、呼吸を整えようとする。しかし、鼓動は速いままだ。全く制御できない。鼓動に急かされるように、いつもならば考えられないような行動にも出てしまう。

「温かい……」

彼の胸板に頬を当て、じんわりと伝わる温もりに安堵の息を漏らす。文香の長い黒髪が腹に乗って少しくすぐったさを感じたのか、彼がわずかに身動ぎした。だが、目を覚ますには至らない。

酔い潰して正解だった。

文香は頭を持ち上げ、彼の眼前に顔を近づけた。容易に接吻ができてしまう距離感でじっと彼を観察する。今は眼鏡も外していて、だいぶ印象が違って見える。理知的で精悍な顔立ちであっても、寝顔はこんなにも無邪気だ。

この顔をいつも見ていたい。文香はそんな想いに駆られて携帯電話を取り出すと、慣れない手付きで彼を撮影した。顔、全身、上半身、下半身、足の指先に至るまで激写し、自分の行為に興奮を覚えたのからしくもなく息を荒らげる。

寝ている男の人の体を撮影するなど、破廉恥極まりない。だが、ここに来て罪悪感を募らせ、何もしないというのはあまりにも勿体なさすぎる。せっかく、同僚の年長アイドルたちの力を借りて彼を居酒屋に強制連行し、酔わせてから彼の自宅まで運び入れたのだ。

ちなみに、未成年である文香は当然酒を飲んでいないが、空気に酔ったことは否めない。

「このまま、求めてもいいのでしょうか……？」

自分に問うが、答えは決まっていた。

文香は決心すると、服を脱いだ。ゆったりとした衣服からでもわかる母性的な女体と染みや傷一つない白い柔肌を曝け出し、無防備に眠ったままの彼の上に腰掛けた。男性の上に乗るなど初めての経験だ。でも、慣れていかなければならない。今日は一晩中、彼の上で彼を求める予定なのだから。

彼の特定の部位に熱が集まるのを感じつつ、文香は彼に跨ったまま

上体を倒した。重なるように肌を接触させ、彼の顔を至近距離で眺めると、欲望が急激に膨らんだ。
「プロデューサーさん……？」
声を掛けても、返ってくるのは安らかな寝息。
「起きてください……」
思ってもいない言葉を掛ける。心に決めたとはいえ、文香はこれから行うことに罪の意識を感じていた。同意なく他人の寝込みを襲うことはしてはいけない。それは常識的な考え方であり、文香にも十分わかっている。
それでも、この選択を取らざるを得なかった。
「起きないと、襲ってしまいますよ……」
彼は真面目だ。彼がプロデューサーである以上、アイドルである文香の想いに応えることはない。導くべき存在を自分の手で汚すわけにはいかないと彼は思っているのだろう。その考えは何も間違っていないし、そんな誠実な彼だからこそここまで文香はついてきた。
文香は思い返す。彼と積み重ねてきた日々を。
『レッスンは順調のようだな。さすがは私が見つけた逸材だ。ふふ、自分の観察眼が恐ろしい。天才か？　私は。そうだ、天才だ。なにせ、この業界に転職して早々にトップアイドルの原石を見つけてしまったのだからな』
『レッスンを継続しつつ、これからは本格的にアイドルとしての仕事もしてもらう。いろいろと新しいことだらけで混乱するかと思うが、困ったことがあればすぐに相談してほしい。何、私というサポートがいれば大丈夫だ。大船に乗った気分でいるといい』
『小さな商業施設で開かれるミニライブ。しかも、当たり前ではあるが単独ライブでもない。とはいえ、ライブには違いない。大丈夫だ。今の君の実力を発揮できれば問題ない。……緊張して失敗しても構わない。肩の力を抜くといい。ふむ、まだ表情が強張っているぞ。では、私が長年温めていた渾身のギャグを披露してやろう』
『失敗は誰にでもある。私も失敗を重ねてきた。大事なのは、次に活かすことだ。いつまでも後ろを見ていても成長はしない。……あー、

つまり、だ。そ、そんなに泣くな。どうしていいのかわからないではないか』

『安心しろ。私はいつでも君の傍にいる。私は君のプロデューサーなのだからな。ただ、ステージの上まではついていくことはできない。スポットライトを浴びるのは私ではなく、君だ。楽しいことばかりではなく、これから先も辛いことはあるだろう。だが、一人で抱え込まずに、困ったことがあればすぐに相談してくれ。賢くて優秀なこの私が、全力で君の明るい未来を描いてみせよう』

落ち着いているかと思えば、たまに妙にテンションがおかしく、自信家で、意外に繊細な彼。しかし、彼ほど一緒にいて心が安らぐ者もいない。トレードマークの眼鏡を指で押し上げ、不敵に笑う彼を傍で見ていると、ここが自分の居場所なのだと思えた。

ここが自分の居場所。誰にも渡さない。誰にも取られたくはない。でも、ずっと一緒にはいられない。いずれは彼も新しいアイドルに担当を移されるだろう。そうなったとき、他のアイドルが彼のことを好きになったらどうすればいいのか。自分の全てに自信を持てない文香にとって、彼との間を引き裂く第三者の登場は考えるだけで恐ろしい。

恐ろしくて、胸が引き裂かれそうで、眠れない日もあった。大好きな読書の手が進まないときもあった。こんなに苦しい思いをするくらいなら、恋をしなければいいと考えるときもあった。

それでも、文香はこの恋心を捨てられなかった。また、正々堂々と彼に想いを伝え、断られる未来も見たくはない。彼の傍にいられない自分を想像したくもない。

だから、文香は卑怯な手を使うことにした。

彼が泥酔している間に、既成事実を作る。よくある手法で、文香も前に考案したが、あまりに一方的な行いであるために諦めたはずだった。しかし、つい最近になって同僚のアイドルである高垣楓が同じ手法を取り、意中の男を無事に射止めたという話を本人から聞いた。

『自分勝手で悪いことだとは自覚しているけど、それが効果的な手だったから。彼を手に入れたい。自分だけのものにしたい。彼をこ

れ以上傷つかせないために、私という檻に閉じ込めて、幸せという鍵を掛けることにしたの』

そう語る楓の目は、一縷の光も湛えていなかった。覗き込むだけで引きずり込まれるような暗い瞳。ゾクリと背筋が震える恐怖を覚えるとともに、文香は強い共感も抱いた。

告白をしても絶対に断られる。自分の想いを捨てることも文香にはできない。それなら、それならば、もう取るべき行動は決まっている。

文香はそうして、実行に移した。

ここまでは順調。本番はここからだ。

「私の、私だけのプロデューサー……」

彼の顔を至近距離で直視する。

「心も、体も、全部、私のものに……」

見れば見るほど、彼に惹き込まれる。これほど愛おしいと感じる存在がいるなんて。この人を手に入れるためならば、何でもできる気がした。狂気にも等しい楓の深すぎる愛情も、今ならばわかる。それに近い感情が心の中に宿っていた。

「はぁ……」

熱い吐息をこぼし、頬を紅潮させた文香。その口元は綺麗に吊り上がっていて、彼だけを見つめる瞳には窓の外の夜空よりも濃い闇が広がっていた。

「月が、綺麗ですね……」

窓の外にちょうどよく見える欠けた月を見て、文香は彼に話しかける。相変わらず、彼は心地よさそうに眠っている。月の輝きは勿論、裸になって覆い被さっている自慢のアイドルの姿にも気がつくことはない。

彼が目を覚ましたときには、全てが終わっているはずだ。

その頃には、彼は責任を取ってくれるだろう。彼が抱く罪悪感を思うと心が痛むが、許してほしい。これからずっと、一生傍で愛し続けるから。不幸だとは感じさせないから、どうか不器用で卑怯な自分を受け止めてほしい。

「いただきます……」

そっと耳元で囁くと、文香は愛する男と契りを交わした。

高垣楓5

夜。居間のソファーに一人腰掛けた俺は、正面にあるテレビを観ていた。

俺には一人でテレビを観る習慣はあまりなくて、ほとんど無用の長物といってもいい。一人のときはインターネットの動画配信サイトで映画を見てばかりいて、誰かが家に遊びにくるときくらいしかテレビの本領が発揮されることはない。

そんな俺がなぜ、こうして真剣にテレビと向き合っているのか。

『ええ。ビールもそうですけど、焼酎もしょっちゅう飲むんですよ』

全国放送のバラエティ番組で、駄洒落を言い放つ出演者のアイドル。楓だ。にっこりとした微笑みを浮かべる顔は非常に美麗で、二十五歳という年齢でありながら少女のような幼さも感じさせる。いるだけで視聴者を釘付けにする美貌。

しかし、楓が放った言葉でスタジオ内が水を打ったようになる。

これは生放送ではなく収録だが、それでも凍った空気を完全に編集で誤魔化すのは難しいようだ。

普通に放送事故だが、そこへ思わぬ助け舟が現れた。

『しょ、焼酎を、う、しゅっちゅう、って、そんな……くくっ……』

二十五歳のアイドルの駄洒落で笑い苦しむのは、隣の席に座る高校生アイドル。如月千早（きさらぎちはや）という少女は楓と同じく圧倒的な歌唱力で話題を集めていて、そういう共通点から事務所の違う楓と一緒に出演をしていた。

どうやら、歌だけでなく感性も楓と似ているようだ。

『いや、笑い過ぎやろ！』

という司会を務めるベテラン芸人の笑い混じりの声が響き、観客の笑い声が上がる。

『ふふ……』

それには楓もご満悦のようで、綺麗な笑顔をカメラに見せていた。

活き活きとしている。本人曰く、少し前まではテレビの前でも猫を被っていることも多かったようだが、段々と自分らしい自分を見せら

れるようになったらしい。そんな楓を周りも拒絶することもなく、受け入れてくれているとのことだ。
戸惑っている人はまだ多いが、いずれは周りも楓のキャラに慣れるのだろう。素直に嬉しいと感じた。
一方で、ほんの少しだけ悔しいと感じる自分もいて、俺は驚いた。
この感情はたぶん、本当の楓を独り占めしたかった、という想いなのだろう。それを冷静に分析すると、俺は強い羞恥を覚えた。赤く火照った頬を隠すように、手で口元を掴むように覆った。
「やばい、恥ずかしい……」
「何がですか？」
声が聞こえた。今、テレビから聞こえてくる声と同じ声が、右横から。
驚きで、心臓が跳ねた。今の今まで気がつかなかった。さすがに声は出さなかったが、反射的に視線を振り向けてしまう。
「ただいま帰りました」
仕事から帰宅したばかりの楓が、手をひらひらと振ってみせた。
「おかえり……」
と声を搾り出すのが精いっぱいで、俺はすぐに視線を前に向けた。俺の視線に釣られるようにして楓もテレビを観たらしく、「この前収録した番組ですね」と当時の楽しさを思い出すように言った。
「千早ちゃん、可愛かったですね」
「そ、そうか……」
「他にも歌番組で一緒になることもあって」
「へえ……」
とりあえず落ち着くまで時間が掛かりそうだ。今は楓本人を直視できない。
俺はテレビを観ている振りをしながら、適当に相槌を打った。楓の言葉は耳に入っているが、頭が理解できていない。自分の中にあった思わぬ心境を知ってしまった動揺が俺の心を揺さぶっている。
そんな状態だから、俺は楓の強襲にも対応できなかった。
テレビに向く俺の視線を遮るように、正面に立った楓。ソファーに

座る俺に正対して、膝に跨ってきた。楓はこの体勢が好きなようだ。もう何回もこうして甘えられることがあるのだが、今はちょっとまずい。
「ただいまのキスを、していませんでしたね」
蠱惑的に笑う楓。俺の心情を知っているわけではないから、純粋な興奮からだろう。
楓のキスは、長い。基本的に楓が満足するまで終わらない。
「今日はいい……」
「駄目ですよ。毎日しないと。行ってきますのキスもしたんですから。片道では困ります」
そう言って、口元を抑える俺の手を引き剥がそうとする。
「手、離してください」
「よせ……」
「強情ですね。今日はどうしたんですか？　あなたの下に帰ってきたという、証をください」
「後で、するから。必ず」
「むぅ……。あとで、絶対ですよ？」
俺が言うと、楓は少し不満を見せつつも、手の力を緩めた。
俺はほっと安堵の息をついた。
そろそろ大丈夫そうか？　ようやく動揺が鎮まり始めたときだった。
「えいっ」
と、手を引いたかに見せかけた楓によって、俺の手は口元から引き剥がされた。
楓は、俺が何を意固地になっているかわからなかったはずだ。
しかし、俺の顔に浮かぶ羞恥の残滓、それを感じ取ったとでもいうのか、目元に弧を描いた。
「なんだか、いい顔をしていますね」
俺に顔を近づけ、間近で見つめる。頬に楓の熱が、吐息が当たる。甘い匂いが鼻を通り、脳を刺激する。隙を突かれた心は簡単に蕩け、「頂きます」と一言断りを入れた楓の唇が俺に押し当てられた。

文章にしようとすれば、きっと、年齢制限に引っかかりそうな深い口づけ。
視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚。五感全てが、美の化身によって支配される。
ソファーに座っているのに、腰砕けになってしまいそうな、そんな時間が訪れた。
時間がどれほど経ったのかは、わからない。数秒のようにも、数分のようにも感じられた。
俺から顔を離した楓は歓喜に震え、獣のような高揚を露わにしていた。
「夕食の前に、あなたを頂いてしまいましょうか……？」
首筋にキスの痕をつけられた後、耳の中に密閉されたような声が深く響く。
吐息が鼓膜を襲い、思考能力は極限まで削り落とされていた。抵抗する力も弱々しく、楓には逆らえない。ソファーの背もたれが倒され、ベッドに変わったその場所に押し倒され、俺の上に楓が陣取る。
「とても、美味しそう……。隅々まで、味わってあげますね……？」
舌なめずりした楓。濃い色香を全身から発する女帝に、俺は食われた。

「あーん」
もはや恒例と認識できるくらいには、俺は楓によって餌付けされていた。差し出された箸を咥えて、そこに掴まれたオカズを口にする。今俺が食べさせられたのは、大根とぶりの煮物だ。味の染みた大根が口の中で解れ、噛むたびに熱く味わい深い汁が口中に広がる。
俺も作ったことはあるが、ここまで芯の通った味は作れない。
「今度、作り方教えてくれ」
「いいですよ」
なんて平和な会話だろうか。さっきまでの状況は夢のようだ。
だが、まあ、俺は捕食されたのは事実だ。
あんなことがあっても、楓はまだ満足してはいないようだ。それは

俺も同じ。
楓との同棲生活は、底が見えないほど甘く、どこまでも堕ちていけそうだった。
このままでいいのか。もう少し、健全なお付き合いをするべきではなかろうか。
チラリ、と俺は俯けていた視線を上げた。
楓が当たり前のように、俺の視線を正面から受け止め、口元を緩める。
「今日は疲れたので、長湯したいですね」
「一番風呂どうぞ」
俺が言うと、楓は頬を膨らませた。
「もう、一緒に入るんですよ？」
「またか……」
「はい。互いの体を洗って、今日あったことを話し合いましょう？」
そのまま繋がっても、構いませんよ？
そう言って、向けられたのは誘うような流し目。
視線を受けて、俺はゾクリとした。また食われることへの本能的な恐怖と好奇心が滲み出る。
楓と過ごしていたら、俺はどれほど幸せになれるのだろう。過去に抱いた恋愛へのトラウマも、大質量の偽りない愛情で埋没しつつあった。いずれ過去は過去として割り切って、ただの笑い話として思い返せる日が来そうだ。
「わかったよ。今週はあと今日だけだからな。さすがに毎日は一緒に入らないぞ？」
一人でゆっくりと湯船に浸かりたい派だが、一緒に誰かと入るのもいい。
そんなことを思い、夕食後の食休みを挟み、俺は特に身構えもせずに楓と湯を共にした。
夕食時は水面下で抑えていたらしい興奮を再燃させた楓によって、俺は再び捕食された。